第4回第3次教育ビジョン策定委員会　議事要旨

日　時	平成３０年８月３０日（木）　１３：３０～１５：４０
場　所	県総合教育センター　第１棟２階パソコン室
出席者	＜委員＞　１３名 今村　久美 委員、 川治　秀輝 委員、 川瀬　憲司 委員、 嶋﨑　吉弘 委員、 下野　泰輔 委員、 下屋　浩実 委員、 中村　　正 委員、 原　　紀子 委員、 益子　典文 委員、 松野　英子 委員、 矢嶋　茂裕 委員、 吉永　和加 委員、 渡辺　寿之 委員 （欠席者２名、欠席した委員からも事後にご意見を提出いただいた） ＜県＞　１９名 教育長、副教育長、教育次長、義務教育総括監、総合教育センター長　他

会議の概要
１　開会 ２　あいさつ ３　協議事項 ○　「ふるさと教育」のあり方について ○　第３次岐阜県教育ビジョンの骨子案について ４　閉会

意見の要旨

「ふるさと教育」のあり方について

○　「ふるさと教育」は地域のことを学んでいるということで理解されがちだが、地域課題のような子どもたちが当事者意識を持てる課題に取組むという教科横断的・総合的な学びによって、この先を生きていく子どもたちにとって必要なスキルや要素を培うことができるということを、学校の先生にも保護者にも理解してもらえると、「ふるさと教育」に取組む意味合いがでてくる。

○　グローバル社会で活躍する子どもたちにとって、自国の文化や地域性を理解することが非常に大切なことで、日本人あるいは岐阜県人としてのアイデンティティを育てるという観点で、「ふるさと教育」の充実を図っていただきたい。

○　高校生の県外流出が話題となっているが、岐阜県内にとどまるということ、さらには、流出した人が Ｕ ターン、Ｉターンで戻ってくることについては、企業の努力も必要であるが、岐阜県の歴史観を子どもたちの心に刻み、岐阜への誇りをもち、岐阜で活躍できるようなコアな思いを育てるという観点で「ふるさと教育」の充実を図ってほしい。

○　「ふるさと教育」の基本的な考え方は、ふるさと岐阜が本当に素晴らしいところであるという、自信と誇りを持つことに尽きると思う。そのために、ふるさとのよさを伝える側になるということ、地域の一員として地域づくりに貢献していることを自覚すること、地域を守り発展

してきた大人の生き方に向き合うことが大切だと思う。このことは、小中学生だけでなく、高校生にとっても大切な観点だと思う。

○　ふるさとの中で最も大切なものは人だと思う。「地域社会人」の育成を掲げているのであれば、子どもたちにとって、大人が地域の指導者として位置付くことが大切だと思う。また、ふるさとには、文化をはじめとしたいろいろな資源がある。それを支える人の生き様に触れることが大切だと思う。

○　家族がふるさとの原点である。家庭教育の充実についても取り上げる必要があると思う。

○　県外に出ることは決して悪いことではないと思う。そういう人生があってもよいわけで、ただ、いろいろな都道府県の人との関わりの中で、岐阜がどんなところであるのか答えられる子に育っているかということが大切なのではないか。また、岐阜に残って、岐阜を愛して、岐阜で頑張る子も出てくる必要がある。どちらであっても、岐阜の魅力を語ることができるような気持ちになればよいと思う。

○　高校生はまだまだ未熟であるから大人が教えてあげないといけないという印象があるが、時代のスピードには、高校生の方が確実についていっている。大人が、高校生を同じ視線で認めてあげる存在にしてあげたときに、高校生は耳を傾けてくれる。高校生に必要な「ふるさと教育」が論点となっているが、高校生にこういうことをしなさいとするのではなくて、大人や教育する側が工夫する必要がある。

○　ふるさとを一生懸命教えるのではなく、高校生が共感して感動できるような、例えば、県内で活躍している人の経験を、音楽や映像とあわせたドキュメンタリー番組を作るとよいのではないか。その番組を見た子どもたちが、自分たちのキャリアのモデルになるし、高校生の負担もなく取り組めると思う。

○　「ふるさと教育」は誰しも必要だと思っているが、通常のカリキュラムとは別物として「○○教育」という形で示されるプログラムをすべて取り組もうとすると、学校現場のやらなければならないリストが増えていくだけで、いろいろな問題が生じてくると思う。学校現場、先生方に過度な負担をかける事態は避けたい。

○　「ふるさと教育」では、地域の方々と子どもたちの日常的な関わりをもう一度取り戻していくということが大切だ。特に、高校生は地域との関わりが希薄になり分断が起きるので、高校生が地域との関わりをもう一度取り戻すという仕掛けが、高校魅力化のテーマにつながっていくのではないかと思う。

○　地域の良さは、そこを離れてみないとわからない場合が多い。地域にいるときには、地域のよさが自覚できない。マスメディアから入ってくる都会の情報と比較し、ふるさとの「ないもの探し」をしてしまう。ふるさとにあるよさを知る機会が大切だと思うし、その仕掛けは必要だと思う。

○　高校生に必要な「ふるさと教育」という観点からすれば、視点を少し変えて、地域の偉人や名所、地形ということではなく、高校生ぐらいの知識や経験がないと理解できないような素晴らしい技をもつ匠や、県内の企業で日本や世界で活躍する優良企業を選んで、そういったものが地域に根付いて活躍しているということを、実際に話を聞いたり、学習したりするとよいのではないか。

○　岐阜県以外で活躍している岐阜県出身者を呼んで、岐阜のよさや魅力を語ってもらうということが、子どもたちにとって分かりやすいだろうし、実感がわくと思う。

○　「ふるさと教育」の内容面で言えば、子どもたちが将来、どこにいても心の中で「岐阜」というスピリットや共感が、強い形で残っているようなものであるとよい。

○　子どもたちが自分の将来像やキャリアとどこかつながりが出てくるような話題や人のつなが

りを大切にできるとよい。

○　県立高校における地域と連携した具体的な取組みをみると、各学校で多様な活動が見られる。それぞれの学校で育てたいものの背後に多様なものがあり、それに基づいて取組みがされているのだと思う。

○　グローバルな視点を身につけるために日本を俯瞰的に見る必要があることと同様、ふるさとを理解するには、ふるさとを相対的・俯瞰的に見ることができないと、その特徴はわかりにくいように思う。

○　高校生自身が発信する方法を取り入れた上で、各高校で取組むとよいのではないか。小中学校で、身近な地域についてはかなり学んでいるので、高校生は単に教育として学ぶだけではなく、最初から学びながら発信する、その発信の方法は各学校の特色に応じて考えるというような取組みをすると面白いと思う。

○　「ふるさと教育」として、小学校で「ふるさと教育」で何を学んできたのかということが、中学校で把握されていないことがあり、小学校と中学校で同じ場所を訪問し、同じ説明を聞いたことがありつまらなかったという話も聞く。小中学校の連携も十分に図りながら、高等学校へ接続していくと変わってくるのではないかと思う。

○　地域愛というのは、教育を受けなくても醸成される部分もあると思う。

○　「ふるさと教育」はグローバル化との対立軸にあるのか、その先に何かあるのかという心配が出てくる。「ふるさと教育」の目的を明確にしないと、学校は混乱する。

第３次岐阜県教育ビジョンの骨子案について

○　公立高校進学における選択肢として「地域みらい留学」という全国的な取組みを推進している。「地域みらい留学」は、北海道から沖縄まで日本の各地域にある魅力的な学校に県外から入学し、充実した高校３年間をおくることを目的とし、実際に、５６０組の親子、１，１００人がどこかの地域で学びたいと希望があった。

「地域みらい留学」の取組みは、島根県海士町の「島留学」が先行事例となっている。地域の関係性が温かく、つながりがまだ残っている地域はどこも教育環境が魅力的であるいう仮説にもとづいている。

「ふるさと教育」のプログラムを学校授業の中に１時間くらい取組むということではなく、コーディネーターを配置し、高校生に日常的に地域の子どもとしてのアイデンティティを醸成するという取組みによって高校が魅力化し、その結果として、子どもたちの地域外流失が止まって、若い家族のＵ・Ｉターンが増えて、出生数も増えた。また、卒業生が学んだ地域で働きたいという希望もあり、地域の持続可能性が向上した。

岐阜県においても、県外留学という取組みは県内高校の教育の魅力化につながるという仮説のもとで、第３次教育ビジョン期間内から、このような取組みを始めるとよいのではないか。

○　長期目標の指標において、「今住んでいる地域の行事に参加していますか」とあるが、岐阜県の小中学生は全国平均よりも高い。小中学校でこのような流れができているのに、高校生になってしまうと、参加する行事もないし、参加しろとも言われず、地元に戻っても居場所がない。一方で、地元の祭りを高校生に手伝ってもらうと、生き生きと楽しそうに手伝ってくれる。高校生が地域の行事に参加できるような仕組みづくりも必要だと思う。

○　本巣市で数学のまちづくりを進めており、地元の高校生にお願いして小学生に算数を教えてもらっている。また本巣市は幼稚園の先生が不足しているので、高校生にボランティアで高校生に参加してもらっている。このような取組みが各自治体で行われるとよい。

○　「未来を創り出す人材を育成する高校づくりと地域との連携の推進」とあるが、「高校づくり」

ではなく、学校づくりではないか。地域に根差した学校づくりはまさに小中学校の取組みではないか。小中学校においても大切な部分であるので、義務教育の段階でも意識をしてもらえるような書きぶりがよいのではないか。「開かれた学校づくり」という表現は古いので、「地域とともにある学校づくり」「地域の教育力を生かす」などにしたらどうか。

○　今後は、ＡＩやロボットを作る人間、それを扱う人間が増えてくると思うが、それ以外の仕事は、人と関わる仕事くらいしか残っていかないと思う。その点からすれば、将来に必要な力というのは、コミュニケーション能力や説得力、プレゼン能力（表現力）などである。将来に本当に必要な力として大切にしていく必要があり、そのことがビジョンの中で明確に示されているか。これからの時代に求められる資質・能力は学力でくくり切れない部分があると思う。

○　子どもたちに身につけさせる力として「自立力」「共生力」「自己実現力」が示され、よく考えられていると思う。

○　入社してくる社会人には、チームの中で働くことが弱い人が多いように感じる。あいさつができないとか、以前ならできていた基本的なことができない印象がある。そのことで、トラブルにつながることが少なくない。もう少し盛り込む必要があるものとして、「共生力」において多様性を認めるという取組みとして、チームの中でいろいろな人たちが協力し合って、助け合って解決していくことや達成していくことを感じられるようなものに取り組んでほしい。

○　キャリア教育の策定に係る主な意見として、小学校では、人間力やコミュニケーション力を高める教育が挙げられているが、中学校や高校においても引き続き取り組んでほしい。

○　県外留学をはじめとした取組みについても、助け合って達成できたという思いが子どもたちの中に強く残れば、その思いがふるさとに帰る楽しみにつながってくると思う。

○　今の若い人達は地域の行事にあまり参加していないように思う。参加することによって、地域のことを教えてもらうことが大切だと思う。

○　長期目標の指標において、「家の人と学校での出来事について話をしますか」とあるが、子どもは、年頃になるとなかなか学校のことを話してくれない。社会に出たときのために、今のうちから、言葉を使って話ができるとよいと思う。

○　自分たちの仕事がＡＩで代替可能となることで、高校生や大学生が自分たちの将来について「どういう仕事につくべきか」という心配をしている。ＡＩに対する実際の取組みとして、将来的に必要とされるスキルはどのようなものか、教育の中に取り入れていく必要がある。

○　今後、外国人労働者がたくさん入ってくる中で、英語でコミュニケーションをとらないと仕事が進んでいかない。その点からしても英語教育は盛り込んでほしい。

○　オール岐阜と銘打つ以上は、先ず県当局（県庁内）での一元化を図ることが肝要だと思う。行政の縦割りの限界もあると思うが、子どもたちが主役であるので、県当局自体の連携体制についてはスピーディに対応してもらいたい。

○　専門高校では産業教育が行われているが、普通科高校では産業分野の専門的な学習はしない。例えば、会計の分野では、商業高校では教育が行われているが、普通科ではほとんど行われていない。普通科高校においても産業教育に取り組んでもよいのではないか。

○　島根県の県外留学は町全体が一丸となって支援している。高校生にとっても地域との一体感は重要である。人間は一人で生きていけるものではない。

○　地域の魅力をどう打ち出すかというのは難しい部分があるが、この委員会を通じて、高校に様々な特色があることを知った。高校生同士がお互いの高校の特色を知る機会があってもよいと思う。

○　ＡＩに関して、感覚を育てることが大切だと思う。また、世の中に出ると、答えがない問題がいっぱいある。正解ばかりを求める教育だけでなく、多くの失敗により柔軟に対応できる子

どもたちを育てることが大切だと思う。

○　ＡＩによって将来どんな仕事が減るかということについては、子どもたち以上に親の世代の危機感にあるように思う。大学生の多くが公務員を希望している印象を受ける。

○　変化に対応できたものしか生き残れない。変化に耐えられる子どもたちを育てるために、大人が関わって育てていかないといけない。

○　主体的に、例えばどこかの高校で思い切って株式会社をつくり、さらに、県内で活躍している人に高校生がインタービューをしたり、音楽や映像とあわせてドキュメンタリー番組を作ったりすることもよいのではないか。そういった体験をする機会が大切だと思う。

○　学びの再チャレンジの部分にも手厚い施策を盛り込んでほしい。例えば、多くのベテラン教員が定年を迎える時代になるので、その先生方に学び直しの分野で活躍いただくような方向性を示してもよいのではないか。

○　学びの様々な選択肢がある中で、例えば、普通科高校から、定時制・通信制高校へ、さらには地域密着型ではない広域型の高校へ選択肢が広がっている。この点について、必ずしも、学び直しの制度が有効に活用されているとは思えない。表現も含めて検討してほしい。

○　国際理解教育とグローバルな人材の育成に関しては、英語が国際標準語として優れた言語であるのは確かだが、英語はあくまでもツールでしかないので、学校の特色に応じて第２外国語を導入する学校があると、視野が広がっていくと思う。

○　校舎修繕についても手厚い予算をつけていただきたい。

○　日本の教育文化は画一化に走りがちである。規則を決めて、それに適合しない人を排除するという方向に動いているように思う。画一化の動きは、いじめの温床にもなるし、さらには、個性を伸ばすことや国際人を育てることに逆行する。画一化教育の反省を含まないと、多文化共生能力は意味がない。

○　子どもを画一的にすることに限界がある。教育に対する価値観を根本的に見直す時期にきているという考えを、施策に反映できるとよい。

○　人間性という論点に切り込んでもよいのではないか。人間性は重要な観点だと思う。例えば、国際バカロレアのＩＢスクールの学習者像の人間性を 10 の人物像（探究する人、知識のある人、考える人、コミュニケーションができる人、信念をもつ人、心を開く人、思いやりのある人、挑戦する人、バランスのとれた人、振り返りができる人）として表している。このような人間性の部分を大切にしていくべきではないか。このことは、道徳教育とは違う。人間性の部分は教育ビジョンのどこかに書いてもよい

○　英語教育は大切である。例えば、姉妹校提携を推進して、海外の先生が日本で授業ができるような県独自の交流をするなどもある。

○　海外のトップ校への進学に関するノウハウの提供等、希望者をサポートする体制の整備という意見があったが、ＩＢスクールにはそのようなものがある。ＩＢスクール導入の動きは、他県で広がっている。岐阜県にもそのような学校が１つあってもよいのではないか。